

バリ島の舞踊の表現戦略

河合 徳枝・大橋 力

インドネシア・バリ島の舞踊は、それについての知識や経験をもたない異文化圏にすむ人々、はじめて観る人々をただちに惹きつけるという点で特異な魅力をもっている。高度に熟した形式・内容をもつだけでなく、その背後にきわめて合理的な表現戦略をそなえているところに、バリ島の舞踊の注目すべき特異性があるのではないかとかんがえる。その表現戦略について、著者らは「生得性に着目した効率・確率のたかい快感誘起」という仮説をたて、現在体系化をすすめている感性情報論にもとづいて検討をおこなっている。ここでは、これまでみいだされた点について報告する。

①アマチュア志向

バリ島のさまざまな芸能の演者のなかで、プロ・アーティストの存在はごくまれである。バリ島全土で約6,000を数える芸能集団（スク）のほとんどは、それぞれの村の寺の祭りで、神々への奉納舞踊や儀式をとりおこなうために結成されたものである。一方、最近、優秀な西洋芸術のプロがバリ島の農民に教えを乞うという事実がある。西洋芸術の専門主義的やり方が、本来人間に可能なさまざまな表現をかえって衰退させたかもしれないという問題点をみなおす鍵として、バリ島の共同体の芸能は注目される。

②純粹化の回避

バリ島の舞踊は洗練をきわめたものでも、宗教性、儀式性をうしなわない。西洋芸術が芸能を要素に分解し、それぞれの純粹性を追求してきたとは逆に、バリ島の芸能はさまざまな要素を渾然一体にすることを志向してきた。西洋のバレエやオペラでは、歌手や踊り手だけが舞台上に姿を現し、楽団はオーケストラピットのなかにかくされる。演奏者が舞台上に登場する場合には黒い衣裳をきるなどし、聴覚以外の情報要素を極力排除しようとする。バリ島では踊りと楽器はおなじ空間内で、つねに一体となって情報を発信する。楽器にも彫刻や極彩色がほどこされ、視覚的要素としての役割もになる。芸能の上演時には香もたくななど、バリ島では五感にうったえるあらゆる快感誘起の情報が総合的に駆使される。

③身体機能の合理的な活用

バリ島の舞踊では、人間が日常的によくつかう手・指・顔といった身体機能を存分に活用して振付けがなされる。西洋のクラシック・バレエでは対照的に、足の演技がもっとも重視され、足の機能向上に多大な時間とエネルギーがつかいやされる。

にもかかわらず、クラシック・バレエのプロによる訓練された足の表現は、アマチュアの演じるケチャの手の表現に圧倒されてみえる。これは人間のもつ生物学的宿命として、身体のなかで手ほど操作性にすぐれ、迅速、適確に複雑多様な運動ができる部位がないからである。人間がもつ本来的な構造と機能とをたくみに活用し、操作性のたかい部位を優先して表現の武器につかうのがバリ島のやり方である。

④記号化された意味性の排除

インド舞踊では、手・指・目などの動きに言葉とおなじような意味づけがなされ、記号化されている。したがって事前にルールを学習しておかなければ伝達がなりたない。バリ島の舞踊での流れるような手の動きや細かく震える指とすばやく動く目は、そうした学習や約束ごとには依存せず、むしろ生理的な快感誘起反応をひきおこすことをねらったやり方である。ことにバリ島では、舞踊や造形表現に、快感誘起性のたかい動物行動学でいう威嚇のパターンが多用されている。物語性をもった演目では、バリ人ならだれでも熟知している筋書きをもちいる。またたとえ筋を知らなくても充分楽しめるように、せりふに依存しない演出がなされている。

⑤抑制的表現

バリ島の舞踊ではストレートな写實的表現はあまりみられず、抽象化された表現がとられる。いわゆる芝居がかった誇張された表現よりも、むしろ抑制され凝縮された表現が好まれる。動き方も手を左右に直線的に広げるといった単純なパターンは避けられ、手足の各部分に、関節ごとに異なるベクトルをもたせることで、全身につねに緊張感をみなぎらせる。極限的な動作でありながら直線的にはそれを表さない屈折したやり方で、緊張と迫力のある表現をうみだしている。

⑥対称性の重視

バリ島の舞踊の振付けや演出では基本的に対称性が重視される。たとえばレゴンの前半部分でつねにみられるように、左右に並ぶ踊り手は、王と王女や兄と弟という役割があるにもかかわらず、容姿・技量がよく似た踊り手が選ばれ、まったくおなじ所作を演じる。また、所作の型や動きの回数における左右の対称性もきわめて厳格にまもられている。これらは、山と海、善と悪、右と左、男と女などに象徴される、相対するものは共存し補完しあうものという、バリ島の二元論的宇宙論にもとづいているといわれる。このような人間本来の身体的あるいは社会的なバランスをつねにたもとうとする発想から、バリ島の舞踊の成熟した形式がうみだされたとかんがえられる。